

第7回 北九州空港滑走路延長事業環境影響評価技術検討委員会
(議事要旨)

日時：令和5年5月31日(水) 14:00~15:20
場所：北九州市立商工貿易会館 2階 多目的ホール(北九州市小倉北区古船場町1-35)

出席委員：^{うえだ なおこ}上田 直子(北九州市立大学 名誉教授)
^{おかだ やすあき}岡田 恭明(名城大学 理工学部 教授)
^{かわさき みのる}川崎 実(日本野鳥の会 北九州支部 支部長)
^{のがみ あつし}野上 敦嗣(北九州市立大学 名誉教授)
^{まつふじ やすし}松藤 康司(福岡大学 名誉教授)(委員長)

<敬称略：五十音順>

議事要旨

1. 環境影響評価に係る手続きについて

- ・事務局より、環境影響評価に係る手続きについて説明を行った。

2. 国土交通大臣意見の概要及び事業者の対応(案)について

- ・国土交通大臣意見の概要及び事業者の対応(案)について、事務局より説明を行い、以下の質疑がなされた。

委員：資料2のP2に記載されている「検討の過程やその対応方針等を公開し、透明性を確保することを検討する」については、どのように考えているか。

事務局：追加的な環境保全措置を講じる場合には、事後調査に関する委員会を開催し、審議いただくこと等が考えられる。

委員：調査結果や検討の過程については公表されるのか。

事務局：環境影響評価の手続きで「報告書」を作成し、そこに調査結果等を掲載する。報告書はホームページ等で公表する。

3. 環境影響評価書の補正内容(案)について

- ・環境影響評価書の補正内容(案)について、事務局より説明を行い、以下の質疑及び助言がなされた。

委員：評価書(案)8.7.1-128ページのバードストライクの発生状況について、鳥の種類等は分かるのか。

事務局：(整理した資料を画面表示)特に目立つ種は、トビ、ツバメ、シロチドリである。

委員：示された資料は評価書に反映されるのか。

事務局：検討する。

委員：評価書手続き以降の事後調査期間においても、このような調査結果を引き続き収集されたい。

委員：評価書(案)8.7.1-128ページのバードストライクの発生回数は平成30年以降減っているが何らかの対策を講じたのか。

事務局：主にトビへのバードストライク対策として、ロードローラーによるトノサマバッタの転圧駆除を行ったことが理由として考えられる。

委員：平成18年の空港開港段階での環境影響評価でのバードストライク予測結果は、現状と一致しているか。

事務局：開港時は環境影響評価法制定前であり、バードストライクの予測は実施されていない。

委員：バードストライク発生回数の予測精度について、他空港において環境影響評価での予測値と実態との比較による確認が行われた事例はあるのか。

事務局：把握している限りでは行われていないと認識しているが、改めて確認する。

4. その他

- 委員 : 脱炭素に関して、「脱炭素化」や「脱炭素社会」といくつか表現があるが、どのような違いがあるのか。
- 委員 : 一般的には実施している取組に対して「化」と表現を用いて方向性を示していると思われる。
- 委員 : 2050年には「脱炭素」を実現させる必要があり、その途中段階においては「脱炭素化」と表現されているのではないだろうか。
- 委員 : チュウヒの繁殖状況について、評価書では2021年度の調査結果より作成されているが、引き続き継続的な調査を実施されたい。
- 委員 : 事後調査として今後も調査を実施していただき、新しいデータが得られた場合、報告いただきたい。
- 委員 : 北九州空港における今後の発展について、どのように考えているか。滑走路延長後に新たなアセスが実施される場合には、今回の成果を是非活かしていただきたい。
- 事務局 : 現状、北九州空港における新たなアセスは想定していないが、北九州空港の発展については、北米・欧州向けの貨物需要増加が想定され、今年2月にはUPSが就航した。また国内貨物としてヤマトホールディングスとJALによる貨物便就航が予定されている。
このような貨物需要の増加に伴う貨物エプロンの増設等が現在予定されており、北九州空港の物流拠点化を目指し、引き続き取組を進めて参りたい。

以上